

# 秋葉のみずつち学～茶葉古道



● 資料展「秋葉のみずつち学～茶葉古道」  
開催日時 7月14日から10月8日  
12:00-17:00 \*火曜水曜休み  
会場：茶摘み俱楽部事務所  
資料や写真などの展示。見学無料。

● ワークショップ「秋葉のしおり作り」  
開催日時 7月14日から10月8日  
12:00-17:00 \*火曜水曜休み  
会場：茶摘み俱楽部事務所  
参加費 100円（材料費） \*申し込み不要  
秋葉区のお茶っぱで、しおりを作ります。



## ● 「まちあるき～AKIHA 茶葉古道を訪ねて」 \*要申し込み 雨天中止

### 1. 秋葉公園周辺

開催日時 7月17日 13:30-15:00頃まで  
集合・解散場所 秋葉公園  
参加費 300円（保険代・資料代）



### 2. 小口地区

開催日時 ① 9月23日, ② 10月7日。各日  
13:30-15:00頃まで \*両日とも内容は同じです。  
集合・解散場所 小口公会堂  
参加費 300円（保険代・資料代）



主催・お問い合わせ先 新潟茶摘み俱楽部事務局 電話 025-225-5312

新潟市中央区本町通6本町中央市場（人情横丁）ピュアワーロン内

ブログ <https://ameblo.jp/chatumi-niigata/> メールアドレス chatumi.niigata@gmail.com

# 愛好家も酔いしれる 甘い味わい 新津の手もみ茶

茶と共に生きる新津



茶摘み

『新津市史資料編6 民俗・文化財』  
338頁より転載



生葉を蒸す

『新津市史資料編6 民俗・文化財』  
339頁より転載



小口地区の茶芽  
(平成29年5月撮影)

新津茶の歴史は江戸時代までさかのぼります。明和5年(1768)、新発田藩御用達であった桂六郎左衛門誉春が宇治より茶種を持ち帰り、田家村の山地に播種したのが始まりといわれています。その後、茶の栽培は村民にも広がり、寛政2年(1790)の越後国蒲原郡田家村明細帳によると、「茶畠九町六反式拾四歩(約9.5ヘクタール)」で茶が作られていました。安政5年(1858)の修好通商条約締結により、茶が生糸と並ぶ重要な輸出品となると、全国で茶畠の開墾が進み、慶応2年(1866)には新津村で1000斤、田家村でも700斤ほどの生産量になりました。(1斤=600g)

## 新津茶業の発展

明治維新前後には田家・新津を始め、程島・中村・東島等の村々でも、茶を栽培するようになります。特に小口村では、高品質茶の生産体制が整えられ、明治5年(1872)には、藁覆茶園を利用した「越後玉露」を生み出しました。また、政府が茶輸出振興策の1つとして紅茶の生産を奨励したため、新津では、明治12年(1879)に新津製茶会社と紅茶製伝習所を設立し、紅茶の生産にも乗り出します。しかし、好況の半面、粗悪品が出回り、日本のお茶はアメリカやオーストラリアで信用を落とすことになります。

そこで政府は明治16年(1883)全国茶業組合を作り、粗製濫造の取り締まりに乗り出しました。新津でも明治17年(1884)に新津茶業組合を設立し、品質向上を目指しました。その後、新津茶業は活況を呈し、田家ではすぐに現金化できて利益も大きいお茶は「わせ米」と呼ばれ、貴重な収入源となりました。

## 「茶」から石油へ

新津茶の生産量は、慶応2年(1866)の段階で新津村と田家村を合わせて1,700斤でしたが、明治14年(1881)には33,740斤まで躍進しました。しかし、明治末年(1900年代)には14,500斤まで減少し、衰退の一途をたどることになります。この時期の世界市場は、高品質のインド紅茶に注目が集まり、在来種を原料とした日本の紅茶は評価が低く、輸出は振るわなくなりました。また新津では、新津油田の台頭、米価の暴騰や養蚕業の優位性によって、転業する者も現れました。

今では、「新津茶」の名前は聞かなくなりましたが、小口を始め、大関、田家等の地域に、茶の樹や茶畠が残っています。

## 受け継がれる 伝統のお茶

昭和60年代には生産が見られなくなった新津茶ですが、小口地区では、現在も当時の製茶法が伝承されています。地元の子供たちが茶摘み唄を大合唱しながら茶を揉む姿は、かつて輸出するまでに栄えた新津茶の繁栄ぶりを想像させます。

